

## 野菜需給協議会現地協議会の概要について

野菜需給協議会では、協議会会員が野菜生産現場に赴いて農協・生産者の方々等と直接意見交換を行うことにより、野菜生産の実態を理解することを目的として、平成24年2月7日（火）に千葉県銚子市において、現地協議会を開催した。

### 1 予冷施設及びトマト選果場見学

10時30分からJAちばみどり営農センター銚子を訪れて、大型野菜予冷施設「グリーンホーム銚子」及びトマト選果場を見学した。

予冷施設は、集荷したキャベツ、だいこん等の鮮度保持を行うための施設で、4月後半～5月の出荷の最盛期には、最大10万ケースを一度に保管することが可能とのこと。今の時期は予冷の必要がないため冷蔵施設は稼働してないが、集荷施設として利用されており、梱包された野菜を運ぶフォークリフト等が行き交っていた。

トマト選果場は、冬場は出荷が少ないため、週2回程度の稼働であるが、機械だけでなく、人の目でも厳しく選別されているとのこと。



### 2 意見交換会

11時45分から銚子プラザホテルにおいて、地元の生産者等から産地の現状について説明を受け、その後、参加者との意見交換を実施した。

○[意見交換会議事概要についてはこちら](#)

### 3 直売所見学

その後、イオンモール銚子へ移動し、この中にあるJAちばみどりの直売所「みどりの大地」を見学した。産地ならではの新鮮な旬の野菜が安値で販売されており、参加者もいろいろな野菜を購入していた。



## 野菜需給協議会現地協議会 意見交換会

1 日時：平成24年2月7日（火） 11：45～12：55

2 場所：銚子プラザホテル（千葉県銚子市）



### 3 議事概要

(1) 全農千葉県本部から、資料1により、千葉県の野菜生産について以下のとおり説明があった。

- ・ 千葉県の農業産出額は4,066億円で、全国第3位の農業県。野菜部門でも全国第3位で、産出額は1,595億円。
- ・ ねぎやだいこん等の品目で全国第1位の産出額となっている。
- ・ 千葉県のJAグループは、首都圏の台所として、安全・安心・新鮮でおいしい農産物を消費者に届けられるよう努力している。
- ・ 千葉県内には21のJAがあるが、JAちばみどりの野菜の販売額は約230億円と、21JAの販売総額の約40%を占めている。
- ・ また、千葉県が産出額全国第1位となっている品目の中にはJAちばみどり管内の旭市や銚子市が主産地となっているものが多々あり、JAちばみどりは千葉県内においても野菜生産の主要な産地となっている。
- ・ 野菜生産は天候に左右されるため、工業製品とは違い安定して出荷できないこともあるが、生産者は栽培管理等にきめ細かい努力を払っていることを理解して欲しい。

(2) 次に、JAちばみどり営農センター銚子から、資料2により、銚子地区における野菜生産について以下のとおり説明があった。

- ・ 銚子市は、千葉県最東端にあり、南東は太平洋に面し、西は香取郡の北総台地に接し、北は利根川をはさんで茨城県神栖市に隣している。地形は、利根川沿いの低地と北総台地からなり、表層は関東ローム層に覆

われており、この土が野菜生産によいと言われている。気象は、年平均15.6度と温暖で野菜生産に適している。

- ・ 都心に近く、東京まで約2時間で輸送ができる。
- ・ キャベツとだいこんが主力で、10月から6月まで出荷。キャベツは625万ケース、だいこんは420万ケース（1ケース各10kg）を出荷する計画を策定している。
- ・ キャベツの場合、7月から播種をして翌年の6月まで出荷をする。寒暖に合わせて品種を選定している。は種、定植、出荷という工程になる。
- ・ だいこんは、定植はしないので、は種、収穫という工程になる。寒い時期に出荷期間が長いのは育つのに時間がかかるため、暖かい時期は育つのが早いので出荷期間も短くなっている。

(3) 続けて、生産者から、最近の生育・出荷状況について以下のとおり説明があった。

<銚子野菜連合会について>

- ・ 銚子野菜連合会は、キャベツ、だいこん及びとうもろこしの3つの組織が合併して平成6年に創立。
- ・ 連合会の取扱品目はキャベツ、だいこん等約10種類あるが、だいこんとキャベツは全体の90%を占める中心作物。
- ・ 重量野菜は不安定要素が多い。天候にも大きく左右されやすく、競合産地も多い中で、価格も常に不安定になりやすい。こうした中で生産者は厳しい経営を強いられているのが現状。
- ・ 昨今は肥料、ビニール類、農薬、段ボール類が原料高から値上がりしており、経営を圧迫している。
- ・ 一方、その割には生産物がなかなか売れず、後継者・担い手不足にも繋がってきている。
- ・ 連合会での農家数は、10年前には1,200戸あったが、高齢化や担い手不足が原因で、ここ10年毎年約50戸ずつ減少し、現在は677戸である。ただし、銚子は他の地域よりは担い手が育っている。
- ・ 連合会としては、安定した出荷、予冷施設の有効活用、農薬基準の遵守、さらには、減農薬等、環境にやさしい農業を目指して努力している。

<キャベツについて>

- ・ 無農薬で安全・安心をモットーに生産しており、1月から3月までのキャベツは、寒いという環境もあり、本当に味もおいしいので、是非消費者の方に味わって欲しい。現在の価格は、一般的に高いと思われがちだが、再生産を行うための最低限の価格なので、消費者の方にはそこを理

解していただいて、私達が丹精込めて作った安全・安心なキャベツを是非味わって欲しい。

<だいこんについて>

- ・ だいこんについては、銚子から日量1万5千~2万ケース出荷しており、前年とほぼ同量。低温、乾燥の影響で細いものが多かったが、2月以降は、被覆ものが出荷の中心となりつつあり、葉が青く、白い品質のものが出荷され、前年並みの日量2万ケースの出荷を見込んでいる。
- ・ 今年は寒波が襲来しているが、昼前まで圃場が凍結しており、だいこんも凍っていたりする。寒い時期に各組合員が収穫して、水洗いをする作業は、結構重労働であるので、こうしたことも消費者の方にPRして欲しい。

<とうもろこし等について>

- ・ キャベツやだいこんの裏作（夏作）として、とうもろこし、にんじんやサラダごぼうを栽培している。
- ・ 千葉県産のとうもろこしは、山武地区に次いで、銚子地区のものが出回るが、真空予冷のものは人気があるので、是非食べて欲しい。

(4) 以上を踏まえ、以下のような意見交換が行われた。

① 参加者からコメント

【千葉県婦人連合会】

- ・ 千葉県産の野菜は放射性物質の検査が行われているのか。
- ・ 今の時期、ブロッコリー等は店頭で外国産のものを多く見かける。なぜ国産がないのか。輸入品は安全なのか。
- ・ 地元産の野菜が店頭に出回っていないと感じているが、銚子で生産された野菜はどこに出荷されているのか。
- ・ 家庭で料理をしなくなったことが野菜摂取量の減った原因ではないか。

【主婦連合会】

- ・ ビニール類の廃材はどのように処理されているのか。
- ・ 千葉県では外国人研修生は受け入れているのか。

【消費科学連合会】

- ・ 野菜生産は稲作の5倍の労力がかかり、ある程度値段が高くても仕方がないと思っているが、物流コストを下げるためには、消費地へ野菜を出荷した帰りのトラックに何か荷を積んで戻ってくるといいのではないか。

【全国青果物商業協同組合連合会】

- ・ 大型のスーパーと小売店では店頭の価格の決め方が違う。小売店とス

一パーでは仕入のロットが異なる上、購入のタイミングも異なることから、販売価格にずれが生じることを理解して欲しい。

【銚子婦人会】

- ・ 地震後、現在でも放射性物質の問題がクリアされているのかというところが少し心配である。

【横芝光町婦人会】

- ・ 農家特有の料理法で我々が知らないものがたくさんある。JAでも既に婦人部で実施しているが、これまで以上に農家特有の料理法をPRして欲しい。

② 生産者側からコメント

- ・ 地元の野菜は出荷前に放射性物質の検査を全て行っており、平成24年度も実施予定。安全なものしか出荷していない。
- ・ 輸入農産物は植物検疫が実施されており、安全なものしか輸入されない。周年供給できるよう新たな品種を導入するなど努力しているが、ブロッコリーは気候の問題もあり、今の時期には出荷できない。
- ・ 最近の若い消費者は、商品の品質を見ないで価格のみで購入する傾向がある。
- ・ キャベツは京浜地区・東北地方を中心に出荷しているが、名古屋へも一部出荷している。地元に出荷されるのは少ないが、大手量販では販売されている。
- ・ ビニール廃材は、農家側の負担によって廃プラスチック工場へ送っており、リサイクルに回っていると思われる。
- ・ 外国人研修生はJAちばみどり管内で現在167名。震災後、水産関係は帰国してかなり減少したが、農業関係は帰国が少なかった。主に中国の大連から受け入れている。
- ・ 物流コストの削減については、野菜を市場へ出荷した帰りのトラックに、段ボールや肥料を積んでくる場合もあり、あとは運送会社の努力にもよる。
- ・ キャベツは露地で大規模に栽培しているため、一か所だけに手間をかけるということはなかなかできない。これから定植するものについては、ネットをかけるといった栽培管理を行えるが、今日、明日出荷するものは自然のままであるため、天気が心配。キャベツはデリケートな品目で、風が吹けば葉が白くなったり、寒いと凍って霜焼けを起こしたりするので、天気予報を見ながら最善の努力をしている。
- ・ 今は寒波、乾燥により価格が上がってマスコミも騒いでいるが、逆の

場合もある。過去にはキャベツの豊作により産地廃棄を経験し、断腸の思いであった。当時はテレビでも放映されたが、これを見た消費者から廃棄するくらいならタダで譲って欲しいとの問い合わせがあり、消費者まで生産物が行き渡っていないのかと感じた。

- ・ 働く女性が増えて、家庭で料理をしない代わりに調理されたもの買う人が増えた。当然割高となるが、値段が安いとかえって買わないという人もいる。

### ③ 農林水産省からコメント

- ・ 野菜の摂取量は、成人で1日当たり350gが望ましいと言われているが、年々減少しており、平成22年度の国民栄養調査では、282gとなっている。野菜の摂取量を増やせば消費者は健康になるし、生産者は価格の維持ができるのもっと野菜を食べて欲しい。

(5) 最後に座長より、本日の意見交換会を踏まえ、現地の実情を野菜需給協議会の会員が把握し、これからの消費拡大に役立てていく旨の発言があり閉会となった。